地域行動に参加して

本所指導部　平川勝俊

市民の署名を手に、上京団いよいよ大牟田出発

昨年からの物不足に乗じた、大企業や大手商社の物価つり上げは勤労国民すべての生活を危機に追い込み、自民党・田中内閣に対する不信と批判は、逆に国鉄・私鉄ストに対しての、利用者の理解ある態度として現われていると思っています。

自民党・田中内閣をはじめとして経団連・日経連・大手商社に怒りの要求をつきつけるために、福岡県民百万人の署名と、中央行動に必要なカンパ活動が、大牟田地区の春闘共闘委員会により、各単組の責任による行動が要請されました。

本所指導部は、駛馬北校区の担当となり、七夕、臼井、宮原の各集団地域分会、駛馬北外来地域分会が、署名とカンパを呼びかける対象地となり、三月十四日と十七日（日曜日）の二回に分けて行動に取り組みました。

今後も春闘を闘って…

広がった自民政治への怒り

署名・カンパ活動に集まった組合員の中からは、「署名だけならできると思うばってん、カンパはちょっとむずかしいと思う」という意見もだされましたが、今日の物価の上がり方は異常な状態であり、生活の苦しさはみんな同じじゃなかろうか。この苦しい現状を訴え、勤労国民の一人ひとりが七四国民春闘に参加するという意味で、やっぱり署名・カンパに協力してもらおうということで意志統一をして、行動を開始しました。

十四日午後五時三十分から七時までの約一時間三十分の行動で、カンパ三千円、署名二百名以上を集めることができました。

一商店の話ですが、「国民春闘ということですが、賛成ですね。社宅の人や近所の人が買い物にきますが、近頃は品物の値段が上がって、買い物の量が少くなりましたし、商売もやりづらくなりました。賃金が上がってもらわんと、私たち商売人は困ります。頑張って下さい。少ないですが」と、心よくカンパと署名をしてくれたのでした。

第二回は十七日（日曜日）午前十時より開始。午前中行動をしました。

署名四百名でカンパ一万円。

中小企業に働いている未組織の労働者の意見は、「国民春闘というが、私たちには関係がないように思います。大企業で働き、組織がある人たちは要求もされるし、賃金も上がってよかろうと思いますが、私のような、組合をもたない、中小企業に働く者は、賃金要求すらできんし、春闘なんて関係なかですもんね」ということでした。

そこで訴えました。

「今日のような物価高が、組織のあるなしにかかわらず、労働者の生活を苦しめている点で同じではないでしょうか。また私たちの要求は、賃金要求だけでなく、物価つり上げを意図的に行なっている大企業・大商社と手を組みながら政治をすすめている、田中自民党内閣に対する、国民としてのはげしい怒りの抗議、インフレ政策の廃止、教育費や医療費の問題、また老後のための老令年金のひき上げなど、私たちの身近かな生活と権利を守る問題をとりあげているんです。

職場の中では合理化がすすみ、労働強化が強いられ、ケガや病気が増えています。これも同じかと思います。ぜひ、職場の中からも労働者の権利と健康を守る闘いを起こしていって、ともに闘って行こうではありませんか」

その人は、そこでいいました。

「いままで、私たち中小企業の組織をもたない者は、春闘から取りのこされ、労働組合のある労働者だけの春闘で、関係のないことと思っていました。でもわかりました。今後も、未組織労働者のことも考えて春闘を闘って下さい」

はげましの言葉とともに、心よく署名とカンパに協力を得ることができました。

インフレ政策が、勤労国民の生活をおびやかしている事実を、署名・カンパ活動を通じて、市民の間に理解が深まったことを確信しています。

私たちの生活と権利を守り、七四春闘を闘い抜くためには、職場の中で、一人ひとりが反合理化の闘いをさらに強化し、そのエネルギーを地域の中に反映させて行くことが大切だと思います。

×

組合員の皆さん。それから三池新労組の皆さん、今は炭鉱労働者にとって重大なときです。どうか苦しい生活の中からの意見を本紙にどしどし寄せてください。がんばってゆきましょう。

編集部

職員の高橋さんが災害死

崩落ボタの下敷きに

動かぬ〝生産第一主義〟

三川鉱

三井三池では、坑内災害のために働く労働者の命の奪われない年はないが、今年もまた早くも一人の職員の命が坑底で消えた。資本の合理化、三井の生産第一主義は一般の労働者と職制とをえらばず襲いかかってくることを、いまさらのように焼きつけた。

三月二十三日午前一時四十分ごろ、三川鉱（前村正一鉱長）の坑底、西五十卸材料運搬坑道の連延詰で、職員の一人――高橋一さん（四十七才。大牟田市南船津町）は、マイト結線中、切羽面から崩落した硬（ボタ。長さ一メートル、幅七十センチ、厚さ三十センチ）の下敷きになり、頭蓋底骨折、下顎骨々折のため即死した。

去年の十一月二十六日には、四山鉱の嶋村係員が払口で起きた落盤のために死亡。今年にはいってからは三月一日、宮浦鉱の今村係員が、不良カッペで頭部を打撲して重傷を負うなど、重要災害が相ついでいるところだった。

職員といい、係員といえば、本来現場における労働のための、保安管理上の責任を負っている人々である。それにもかかわらず、このように相つぐ重大災害のために死傷し続けることは、三井鉱山から独立した三井石炭鉱業にしても、人命軽視・生産第一主義をふりかざす点で何のかわりもないことを示すことだとして、一般の怒りをかき立てている。

三池労組はただちにビラを発行して、①すべての職場で、職制は生産第一のための管理でなく、自分はもとより、全労働者の命と健康を守るための保安管理をしっかり掌握し、坑内保安を確立するようにしよう。②保安法違反の個所はただちに作業を中止し、補修させよう――と呼びかけた。

おらが山は日本一

新炭鉱節じゃないけれど
掘って掘ってまた掘って
今日も出炭日本一

×

そら出ろそらゆけ
過密ダイヤも日本一

×

この寒風に氷抱き
高温多湿も日本一

×

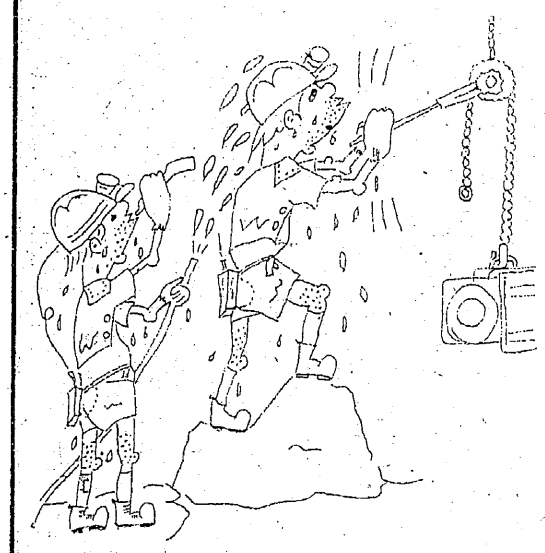
この山は自慢じゃないが
炭鉱事故も日本一

×

今更どこゆくあてもなく
泣きの涙ですがっちょる

×

宮浦指導部坑外分会新聞〝つどい〟（NO・二五）から。

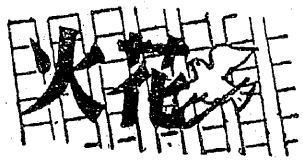


熱い坑内、体がもたん。

宮浦指導部電気分会〝交流〟から

仲間づくりは信頼の杖をたよりに……

大阪　安井昭江



三泊四日の交流を通じて胸に焼きついたこと――それは、自分自身の根性をきたえなければと真剣に考えたことです。

この長年の中で三池の人たちが悟ったことは、人間としてあたりまえに生きることのむつかしさと、ということと、悪条件をなくすためには闘いしかないことでした。そして闘い続けてきた三池の人々と接することができたことは、よかったと思います。

大牟田駅で、三十代だったと思う人から、「まなぶとは、何や。何しにきたんや」と問われ、私自身、はっきりこういう目的できました、ということができなかった。残念に思っていますが、地元の人さえ、炭鉱という言葉は知っていても、この集まりのことを知らされていない現状を、私はむなしく感じました。

交流の中において、第二組合員が圧倒的にその数を占めている。こんな状態で十年もすれば、またもとの姿にもどるのではないかと、不安をいだく人もおられた。

主婦会との交流で痛切に感じたことは、生理休暇のことでした。

私の職場は未組織で、いまだかって生休をとったことはないし、皆もとろうとしません。そのことで、主婦会の方から問いつめられて一〇〇パーセント勝ち取るべきだ。若い人は行動力もあるし、エネルギッシュだから、とにかく闘って勝ち取りなさい。女性が団結して行けば必ず取れるし、法律で保障されている権利だから…と。

たしかにこの休暇は、働く女性には大事な休暇だと思います。今後は大きな問題として、取り組んで行かねばならないと思います。

交流の間に、三池労組の二十四時間ストが実施されました。その報告のなかで、朝早くから皆がビラを配る。通用門を入ってくる人々には、「ごくろうさん」「おつかれさん」と声をかけ、握手するために手を差しのべる。これらの人々のなかには、第二組合員の人もいる。そして、無事二十四時間ストは成功。

それを見て私は、皆の団結と統一があればこその成功であったと思いました。

その団結と、意志統一のむつかしさを克服するためには、具体的にどうしたらよいか。残念ながらいまもってわかりません。しかしながら、口先だけでは永久性はないと思います。

仲間づくりといっても、相手の態度をよく観察し、何か共通するなかに話し合いのチャンスをもち、少しずつ近づき、信頼という杖に支えられて友を広げて行くことが根本的に大事なことだと私は思いますので、この気持を常に抱き、今後わが職場の中でがんばって行こうと思います。

×

この文は第十一回三池に学ぶ会大阪代表団が発行したパンフレット〝報告集〟のなかの一つです。がんばってください。